



平
歌
梅
家
卷
第
二

合
二
冊



伊地知文庫
文庫20
244
2



連歌辨義卷第二

伊地知氏書冊

上小野三上



問 即ち何句に数多句を續くものか今是を
あ句附せしむるは如何し

答 古今六帖に

女をくねむるはくねむる

紀友則

人乃くねむるはくねむる

連歌

此より付きよしと料結縁のさめ海と
朝顔のまのふろ花のう押すも
う付蟬をともえくかきしよひし
かきし子十はくさきしひねも
うさきくたのり水ききりけい
蟻乃あまよひくるのあひし
吹風を雲のゆへ結よあけあ
ゆる雪は空よとめくあつめ

ねく露は帯をくまるとなりけい
八月と山端上げきしけい

阿り原のとき

毛結す湯よと縁つく馬ははくとも
袖のこも小月結光きとせ
ちきしき去年のさきりけい
まみちきよし風をけいあ
田子結浦の波をばいづめあけい

水の泡と志くあそくあぬよ川水色
髪をいよ子尋乃舟をほふぐとも
劫ゴキの石を儀しねふせくともよとも
蚊乃眉子國郡をいそけりも

紀法くゆ業

郭公妻ハチ法ハチなけともいそあゆも
うげろふのかぢとらゆよことりつとも
わふけい波のちねとをいそけりも

漕婦糸のよふ乃一げくきさずとも
網アミめよ吹くる風きさすふよとも
あけり馬ウマ法ハチくとも繩ヒモよ法ハチぶとも
女郎メロウ法ハチわが妻メふくともいそけりも
行ユキ水ミヅ子コぬりくはをさともいそけりも
我袖ワタスエのちうくとも魚イサをすくぬとも

凡河内躬恒

まけいよみぬりなよ影カゲいそけりも

佐保山の紅葉ぬ秋もあけぬやも
かゝるやとほくも能く火のやうに
花も付もよわらうは海もわきも
春のけしき屋もわらぬもわらぬも
あけき毛織もよわらうよわらう
年経たらふ月ならふ月もあけぬも
わづらひもむすびもそこちみも
やうくもよわらうけり能く後
のけしきも

手をとるよ一野の能くもよわらう

一句よあまの句能くよわらう

又源順集よ

應和元年七月十一日四歳なる女を
あひく喜常能くよわらう物よわらう
於然一を乃涙かえり古葉葉集の中
よ油弥満誓がよわらうよわらう
甲よよわらう

らよ抄きくく見る。
下の句と数多
よあるとあり。

源波集よ世中を何よ
とんちふとよとよすく

源順

世中と何よあへん。

あふ秋さけ 朝日まの下の秋乃へ秋露

夕露と 清きくきえぬふれうかの花

飛鳥に さぐぬふき世の流乃水はあわ

うく秋の 夢路をのり小かうかあがこ

吹ゆき 行来も志くぬく秋乃く雲

水とや うつらばせゆくきく松松

秋田秋 かのうにきく秋乃く稲妻

小い水の そこよなううでもやど秋自影

草も木色 枯けく後乃秋の虫はる

冬は秋と ぬるやみる浦よく秋のつと

大中臣能宣集よ

世中乃あふ事を見く。前集集の中よ。

世中と何子とつんといふ十位の大申臣
能宣紀時文をどくよみ侍り申す。
入る。源順の女子とくしをい
くす時の連歌あはれ屋し。
後波集

大中臣能宣

世中紙をよみてをくす。

下きえの。 氷雪ぢうは春の池も
夏州子。 やどね堂乃。夜のとり火
ぬす水乃。 あつね坊集も。ぬのむ浮草

さおろけ。 半入ぬね。やうねを春月
風さしむ。 春の秋乃。けせいのを
明風を。 中風をさぶめ。蜚の釣舟
神世月。 時雨はきぬ。とみら葉の色
まおとく。 風さるり。浅茅ゆらね末
和田結。 うらさく。ぬの浪の上の雪
やりし火。 見つあはれ。夏にね乃虫
草紙集の。 春風よあはれ。見ゆる月影

是は古今古き句を古句として、その終り付るは、
問一首終り哥を二人フタリあそよめるは、連歌なるべ。
短歌ともいふは、又連歌の二句と何とせむ。
多一首乃短歌とせしもあるや。

卷 一首の終り本末を二人フタリあそよめる
紙連歌といふ終り連歌乃二句をあわせて一首
の哥やせしりあるは、後撰集なり

秋の比ひあるは、女どもの阿まゝする
くらよ侍も、小男終り乃とやをいひ入
く侍も、まばす、あいららら

よふ人しらば

あそよ路の、おく子あまの終りすは、
たれ乃つ路く、わりやあそよ舟

是まゝく連歌なるは、ヒトナカ一首の短歌、よなうて撰べ
る。家隆口傳云、對揚歌や、古句とよあそよ、保す
べし、あそよ

「春ささるえ秋ささるえ」の如くかまが山。

そめもす移る色なきわうと移るを津。

是も拾遺集の連ぶく近代もありてスガタ體も

意もココロおととゆる事もあるなる體先今の連歌

よ一一句のうへフミツ二歌意ありと一ヒトツめき一一句の意也。

今即ち津をよお句カミ子附るは活と志のよ頭乃

句おと一句體意あり末の句も亦一句の意也

ゆゑにタカ離る違ふなづく後世も亦この如く

くなるも短ぶらうもスガタ體さへカミわづわの體連歌の

うみもすづも品ぐよありぬも今も連歌乃

二句モト結合すまば短ぶらうも亦あり。短ぶら頭

末の句をわづま連歌とスエ格も亦あるはまは

れ乃ばのうのとめくかめばスガタ也すはよあり

は伊勢物語よむうメト男ありるううある人

さうらみく。

鳥の子歌をばいらいのうらみ

たまたまぬおはるを。あつらひのこ。

やいへるしげ

らおちたき。まゝのまゝもあつらひ。

誰のまゝ。まゝのこをたぐ。

ゆゑ男

あつらひ。あつらひ。あつらひ。

あつらひ。あつらひ。あつらひ。

又女へ

ゆくまよ。びくより。まゝの。あつらひ。

あつらひ。あつらひ。あつらひ。

此四首の歌。今乃連歌のすゝま。あつらひ。古

今六帖。友別。貫之。なまの。あつらひ。あつらひ。

なり。あつらひ。あつらひ。あつらひ。

句多。既子六帖。も見。あつらひ。あつらひ。

連歌を。あつらひ。あつらひ。

問。連歌の入。あつらひ。あつらひ。

おや

答

萬葉集よ先よいへる家持の
さほ河の連お乃と古今集よ見へず清輔の
能説よ古今後撰のま歌と一首のおとて撰え
辨るゆるよりえくくり志のいあまをいへるの歌
おやわよ海へづり後撰集よあ白露の地く
よあまののせりも辨る花乃いあくあくと志く
かみゆいへる連歌歌一首のおあくくえくま
ヒトシサ

あつと拾遺集よ

中将よ侍くるやふ右大辨源致方朝臣も

少人ハ重の紅梅を折くはうえんはとく

右大將實資

流俗のい後よああす梅乃い風

致方朝臣

珍重まきまきと紅梅と見 禮

はくく海よりくる時よかきふさやうはと

流俗とよあつと
よあハ重とよとく
ちやほとよむ連
のちとひあつ

キレラウ

とよやどりて侍るふみらばくまはる
あよぬくおまつけ侍る

もすけ

喜あきとえ秋をあがねかほや山

うらみもきりこころうとね思ふ

良 岑 義方

喜うこころは乃よりこころがむす免のり

よはうとくし

藤原忠君朝臣

松さひとらぬおとよもあるのち

むす免

うらでもありふとねと喜のり

おほとら乃やすうらよほいとておそ

くわとつ勢強ひきまを

うら寸へやあといすておそきり美

おそとらう侍るは

おそやとねありまらうお喜能日

よきよむさし〜くおふとのあき〜ぐ。たは
せ〜新々新

天曆御製

さよあけ〜いふお新あ〜。なるとよ〜り
御ま〜ま〜ひ〜そ〜し〜る

志けの内侍

夏よあ〜ふ〜ま〜お〜やま〜つ〜舞。
内よま〜あ〜お人さ〜ちま〜り〜は〜る〜お。

お〜く〜ま〜う〜ま〜け〜る〜ほ〜ご〜ま〜う〜し〜は〜や〜
ご〜に〜や〜る〜お〜ま〜て〜女〜の〜い〜ひ〜つ〜の〜ん〜
あ〜は
人〜が〜後〜う〜し〜は〜今〜は〜た〜新〜ま〜よ

良峯宗貞

ゆえよ〜し〜ゆ〜や〜お〜新〜を〜過〜ま〜あ〜新

此十二句の〜あ〜後拾遺集よ〜し〜ぶ。金葉集。連
哥 居〜り〜る〜心〜の〜お〜新〜う〜ま〜あ〜な〜の〜あ〜り〜を〜る

人乃物つひきるとき

永成法師

あづか人乃きりて少くゆなま

律師慶範

美ら能くふよとぶくやあらし

桃園のちをを見ず

頼経法師

桃園のちを能く見ず

公資朝臣

梅津若梅きりてやしぬし

加茂の清やしりて物づく音能く

けをゆる

神主成助

志免のちをみりて能く見ず

行重

いづれ能く見ずはくまあらし

宇治より田中子老る男の婦
きりきり見たり

僧正源覺

深一

春融田よすき入ぬべよゆきたるの音

宇治入道大政大臣

の融る風よ水融り融るや

日乃いふを思へ

觀運法師

日融るはよまふよこそ似たりと種

平為成

あゝ融るはよまふよこそ似たりと種

田中子馬のあつるを思へ

永源法師

田中子馬のあつるを思へ

永成法師

苗代のあふちうけと見へはよまふ

よみ人ーらば

うりやの板好よあくも見ゆさ哉

助成 助俊

はらふまうそやけつとそ先事ん

志の能くあを是て

為助

つよ解くあそふーの乃を田の事申

國忠

弓張乃月のあも松を語うそく

宇治へ浦のうそはさあて日ら雨のぬ

うそはばあそ出そ加茂河と男のた

うゆをぬぎそそ手し持そ渡そそく

頼綱朝臣

加茂川をほるそそあそもわそそ哉

信綱

うりむうゆともそそくそ松そいそ

あゆをんき

くみ人あしげ

何子何ゆるとあゆをんきし

匡房卿妹

物亦あしとあゆをんきしとあゆをんき東ふ

和泉式部が衣子あゆをんきしとあゆをんき

子足とあゆをんきしとあゆをんきしとあゆをんき

あゆをんき

神主忠頼

千とあゆをんきしとあゆをんきしとあゆをんき

和泉式部

あゆをんきしとあゆをんきしとあゆをんき

源頼光の但馬守あゆをんきしとあゆをんき

前よけし川とあゆをんきしとあゆをんき

舟あゆをんきしとあゆをんきしとあゆをんき

とあゆをんきしとあゆをんきしとあゆをんき

なりとあゆをんきしとあゆをんきしとあゆをんき

けね

源頼光朝臣

あまのうはみ乃すぐるあかりと
あまのまねよきね

相摸母

胡まふねうの語のさるけきこゆる

読人ーらげ

花くきあたるふくをなかり

前太政大臣家ゆかり

風結満まぐらばあまあり

すまひ草とのふ草のあまのり

むき持させまはを

とみ人ーらげ

あくまよらますまひ草の南

よみ人志らげ

あまのまねあまのりけりあまのり

鳥を籠よひてさく侍くるがまに雨よぬま
をばささく

あめゆづりたを稚子もささくよ節分

うさぎさうらをわらへしやち

このむしの梅結花咲く枝よ阿は
ま見く

律師慶暹

梅乃をぬぎてさきさきとささく

まふるわさいの侍けは

雨より色冷やけちやちあらん

う乃水よりうへると思く

頼算法師

あさきや見世にさきさきうら

續人しらば

はさきさきすこ乃江さきめよさき

とみ人志らば

よるなるすかり。漸にしらぬ
くさ返し。むもわくとふくゆ
はしらと見え

成光

ねくなるきこやしらとふり

観蓮法師

見渡せばしらもとをばしらとふり

是ハ之十八句あるは後の勅撰に連歌の

系

又同金葉集より六のうら。勅撰に連歌の
うら。は事つやむら。道乃衰やあ
ん。志のあ。俊成^{シキ}卿。定家^{サダノ}卿。為家^{ノリノ}卿。為
氏^{ノリノ}。為相^{ノリノ}。為藤^{ノリノ}。お。は。は。は。は。
と。あ。基俊朝臣の。俊成^{シキ}卿。
の。君。や。は。は。は。は。は。は。は。は。は。
ひ。定家^{サダノ}卿。為家^{ノリノ}卿。為氏^{ノリノ}卿。為相^{ノリノ}卿。連歌

数多し〜とある〜出べくも何〜は、
小倉集集より後、勅撰に入らば、
いふるゆゑ、よは、
乃もた〜見聞を〜

答 金葉集より後、勅撰、
連歌の

つら〜道乃、
奇蹟、
い〜

ら、
き多〜
く、
ま、
事記、
送、
名、
を、

了る。連歌ふつあふ。はく天治乃比より。八雲抄云。金葉集八天

治元年依白河法皇論言俊頼朝臣撰之天治二年奏之。此の道終もささのりし。俊頼

抄も。連歌のあやう多くのをきく終基俊朝臣。俊

成卿も。連歌を唱へ十ふり。百韻五十韻賦物ふ

び。連歌もいささく。定家卿。家隆卿も。不談。

五十韻のほ歌はたさく。そのふり。わぶと定

家。年老もひ。後多モハラ専連歌をささむる

よ。彼記も是。あつ。八雲抄ふむ。のり

百韻五十韻あははく。今このやうふ。さ

る。中比より。乃。やあつ。此抄。順

徳院の清作あはた。建保より。承久。あひ。い

でき。今乃。や。よ。ま。中。後。のこ

わ。あ。白河院の承保承暦

の。比。より。連。の。比。なる。と。あ。つ。り。

白河院の承保より。順徳院の承保。その終より。終。あ。と

は。く。百四十年。あ。なる。へ。連。歌。と。道。を。分。つ。り。抄。あ。も。古。の。是。を。と。り。と。り。

るにやよあしう撰た不及口傳故實近年は
無多のこころあしう付之有故實又林宗制事及末
代可存知事云云近年こそ好ふ多乃こそ御事と
あそたりしあはる短歌と連歌と分る事ば教も
ふいふく無多なるべし其後為相卿あど法式氏
作よりなるより短歌と連歌と移しとわいどめ
いできく連歌は連歌のうへふくし何とぞえ
ぬことよしなりぬ重業集より後ちや子載集の

比志のなるよふへし其後の勅撰よぬいともむべし

又問定家卿家隆卿など百韻五十韻の連
歌よ編せよふあもあもや又其比の百韻五十
韻也ミソク全書よりと結を見れば世中さうき
時よりいふいふ人の志う何事ともその比乃ぬ
み今も移のこけり連歌のこけりらさるい
ぬるあよや

答 筑波集よ

後鳥羽院より百韻連哥の中より

あきくけふよる星くまの利

前中納言定家

山藍乃袖よやど襟袂月さえく

建保五年四月院の庚申結百韻連歌よ

あきくけふよる星くまの利

従三位家隆

字くまののー結袂もいふらん

此外にも数多あまぎ志るさげんいふ結あういふ

古くもあまぎと結まへば違ふこのまきふ梨むい

あ乃句よ付るる魚己の句のー紙書とー是もー

中書ナカカキやと各とら出く發句よう梨はよくみふ

書ナカカキのい何と今も晴ハレの會あひまひも中書持出ると

る那ーはー合あはえうに折をりよはき結皆よ立

一句之句は書く結ゆーころへ入る又坐まみるは

事くナカカキ結あくも其ははく結書なるとのたき

はあひぶ定家公老筆露屋一もの久保子結西よ
へく外あつゝ連歌をきくもの久保^{ナカ}半^{スゲ}過るや何るを
二句之句のまゝ歌よあつゝ百韻の五十韻結連歌なる
べし二句之句のまゝ歌あつゝの屈一もの事もあるとて
の折執筆なつゝの障子屋ぶつゝの聞よりんやよつゝ何
げ吟あつゝある所物づゝのつゝあつゝのつゝ各中
まゝとてつゝ幾句くつゝはきくつゝあつゝの事あつゝあつゝ
是ハ繋の會ふつゝの晴結と云ふものあつゝのつゝあつゝの
連歌の條也といやふべし。

問連歌の百句五十句と不約五十韻といふの
詩の聯句は此名目あり。聯句の百韻といふは
句数二不句何るといひ五十韻中の句数
百句あるものつゝあつゝの句に韻字
を用ひてつゝ韻字の数とてつゝ志のつゝあつゝ
志のつゝ連歌不句を百韻といひ五十句と
五十韻といふものつゝあつゝのつゝあつゝ

答

詩社聯句を一東の韻二冬社韻と

入韻より韻字を定くるはよ二百句何れを韻字
百ありは不韻やいつも五十款もする志の連句あり
何れを韻字をの假名五十字之韻字を定むる句を百韻
やいつも五十句を五十款とちいつめつと社あり音は聲
韻病といふも二韻同字強いつあり小式命婦のうも

是引の山がくまをたさくを那。

ちかす乃くはつてはなまをすれ。

此極む所の不韻字やはるまをすかす那の字と扱は
韻なるもバ痛くす又是盛乃字あり

一重はハハ山はきくも一重も。

ほろはるく句は花をさすれ。

むやむ同一字をば病とすく歌經標式よ。

濱成

作

雜韻といつても同一意^{コロ}く連音新式よ一韻^{ヒトツイン}

字事^{ジコト}云志がた夕ぐさちの韻^{トナリ}の更近代不嫌

之とあるも一づまのまは字や夕ぐさを辨るも社

字、抄形ト韻ありてはなり。まことに假名五十字又ふ類字
ゆゑ那架。

問、連、文、結、う、句、カラシク詩の句とく、ツギ又詩の
句、小、連、歌、とて、附、と、和、漢、聯、句、スガタ漢、和、聯
句、と、く、古、く、より、此、種、あ、つ、て、亨、徳、の、比、一、條
大、岡、兼、良、公連、歌、新、式、の、今、案、を、撰、ま、せ、ぬ
ゆゑ、奥、よ、和、漢、結、篇、を、あ、げ、多、く、志、の、阿、比、
ども、其、は、ど、め、成、ら、ら、ぬ、或、人、云、菅、家、業

業、集、又、公、任、卿、乃、和、漢、朗、詠、集、と、纏、く、て
つ、和、中、シラベ漢、と、ま、ま、ぜ、を、さ、す、ぐ、こ、は、ら、る、こ、の、
う、菅、家、業、業、業、を、あ、げ、多、く、志、を、待、ま、作、更
み、よ、の、な、漢、を、連、歌、の、こ、の、は、ら、る、ま、ま、一、又
朗、詠、を、哥、や、詩、と、文、章、を、と、ゆ、へ、こ、の、
う、シラベ風、調、乃、を、より、こ、の、し、ら、め、あ、ら、る、
ま、ま、の、ま、ま、連、歌、の、つ、語、よ、の、め、を、シラベ志、
が、何、を、け、り、免、と、い、す、べ、き、ま、あ、ら、る、

答

清少納言枕草子云是頭中将殿

の翁信中畧卿くふくはつせ給ふ海ふつと久といふ

阿清少や一久伊擧給ぬづらうちあやまき見まじま青

き藤やうよふむきまげまま入給とんりめはし

はるさ満もあざり々紫らん志やう給まぬの蘭省花

と時錦帳下記らんちやうろもむとちさくまいうまくと

阿ふまうらあまむらうん海まのたう一満まを海

らんせきんべきん海づす赤志りがほまたどく一ま

まん赤ま畫しんも見ぐ一那がねも海をのぼる

もぬくせえまむらとせバあまてねくますびつ給まえ

あふすい給ゆるしそ草乃菴をさまらうら給んぬ

のきつはけそやうそせつと云是る白氏文集よ蘭

省花時錦帳下廬山雨夜草菴中ぬ末給句のこ

は給まそそ附らうはく海の句よ和乃句とそ

附らるほド免那ま今給和漢聯句も長保

乃比より抄しそあまもむべ那紫

連歌辨義卷第二終

